

# 森林技術



《論壇》カラマツを活かし、カラマツに生かされる  
～「山基準」と「遊び心」が木を使う暮らしの未来を拓く／原 薫

《特集》国産材の使い途を拡げよう 渡邊豪巳／斎藤直人  
野村純也／谷脇 徹・中島岳彦／福田啓次

- 報告／小宮忠義／落合博貴／伊藤精悟・小野良平・清水裕子
- 連載 森林再生の未来 30 / (一社)九州経済連合会 農林水産部

2016

11

No. 896

## リオ五輪での日本選手 の熱戦を支えた卓球台



◀リオ五輪公式卓球台「infinity」  
(写真提供：(株)三英)

今夏は、リオデジャネイロ五輪に沸いた夏でした。卓球では、男子シングルスで水谷 隼選手が銅メダル、団体では男子が銀、女子が銅メダルを獲得と、すばらしい結果を残しました。今回は、そのリオ五輪で使用された公式卓球台の話題です。

リオ五輪で使用された卓球台の脚部は、優美な曲線を描く木製の脚です。この卓球台をつくったのは、日本の(株)三英という、卓球台では国内トップシェアのメーカーです。以下、同社執行役員の吉澤今朝男さんに伺ったお話を基に紹介します。

同社で五輪へ卓球台を供給するという構想は、2010年頃から始まりました。1992年のバルセロナ五輪以来、久々に日本のメーカーがサプライヤーになったことから、世界に向けて日本らしい美しさや技術を発信したいという考えがあり、脚はスチールではなく木製でつくるという方向になったそうです。

そんな頃、2011年に東日本大震災が発生します。同社が東北に納品予定だった卓球台は出荷できなくなりました。その被災地への思いや復興の思いを込めたものにしたいとのことから、脚の素材として被災地のブナ材を使うことにしたそうです。

デザインを担当したのは、工業デザイナーの澄川伸一さん。そして、曲面を生かしたデザインを実現するにあたり、脚部の製造を担ったのは、成形合板による家具のトップメーカーである山形県の天童木工です。しかし、開発は一筋縄にはいきませんでした。初期のデザインでは、振動などのために基準に合致できなかったのです。その後、何度も試行錯誤を繰り返し、脚の厚さや形状を改良し、基準に適合するものにできたそうです。

これまでは、五輪で卓球台が話題になることはほとんどなかったでしょう。リオ五輪の卓球台「infinity」は、今までにない美しさで、世界で話題となっています。そして、その美しい脚は、岩手県宮古市産のブナ材でつくられているのです。

(おこわり：気仙沼風待ち復興検討会の取組(下)は、  
次回掲載とします。)

(内田信平／岩手県立大学盛岡短期大学部)